

マーガレット・フラーのイタリア便り

—ローマ共和国崩壊とニューヨーク・ジャーナリズムの台頭—

上野 和子

Margaret Fuller's Italian Report

—The Fall of the Roman Republic and The Rise of New York Journalism—

Kazuko Ueno

This paper discusses the last series of Margaret Fuller's dispatches from Rome as being both her finest literary achievement and a valuable historical document. As a correspondent of the New York Daily Tribune, she became radical in her politics as the wave of revolutions swept the Continent. When the French army attacked Rome to get the Pope back, she continued to send dispatches from barricaded Rome in support of the Italian Risorgimento. Through all of her dispatches, Fuller assured her position as a prominent journalist who established a new concept in 19th century American Journalism. Aside from yellow journalism, she set her own standard of having the political news be the most exacting and its commentary be of historical significance. She clearly exemplified her political standing as a republican. With the help of Giuseppe Mazzini and chargé d'affaires Lewis Cass Jr. of the United States, she was able to put political documents in the paper. And in following the same European cultural trend, her romantic diction in her articles became stronger, more succinct, and more realistic.

マーガレット・フラー (Margaret Fuller) による『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』紙 (*the New York Daily Tribune*、以下『トリビューン』紙) の特派員報告 28 からの数本は、1848・1849 年の、ローマ共和国樹立と崩壊、フランス軍によるローマ市街の攻防戦を伝えたもので、報道文として歴史的な記録として、フラーの作品の中で最も優れたもののひとつである。それは、フラーがジャーナリストとして完成期にあり、人生の目標としてイタリア革命期の歴史を書こうとする意志が特派員報告を書く仕事と一致したこともあった。また、この当時、アメリカではメキシコ戦争や大統領選挙など様々に国の方向を決定する重要な局面を迎えていたが、フラーはイタリアの革命運動を伝えつつ、アメリカの共和政および民主主義を基礎とする国家の創生を歌っていたと言えるかもしれない。

この特派員報告で、フラーは近代ジャーナリズムの礎を築く一端を担い、ジャーナリストとしての地位を確立したと考えることができる。フラーは、1844 年旅行記『夏の五大湖地方—1843 年』(*Summer on the Lakes, in 1843*) を出版し、観光地ナイアガラ瀑布をはじめ

め開拓者の生活や困難、先住民部落の女性との交流などを書いた。これが『トリビューン』紙の主幹ホレス・グリーンリー (Horace Greeley) に認められ、1844年から『トリビューン』紙に文芸書評や社会批評などを執筆していた。彼女は、ゲーテ、ジョルジュ・サンド、ホーソー、エドガー・ポーなど国内外の文学作品の批評だけでなく、現場を調査し報道する社会批評も多く手掛けた。それらは、産業革命と移民の波に洗われるニューヨーク市民へのマナーの提言「金持ち一理想的な紳士」や福祉施設の改善を訴える「刑務所・精神病院の訪問」「救貧院・売春婦更生所の女性」、女性問題については「女性やアフリカ系アメリカ人の平等」、ニューヨーク行政への報告書「第27回年次報告—聾啞教育のためのニューヨーク学校の記録と報告」等々多岐にわたっている (Mitchell 55-203)。

グリーンリーは、菜食主義運動や禁酒運動などあらゆる社会改革運動を次々に推進し、中西部や西部の農民層を啓蒙し、偉大な道德組織 (Grand Moral Organ) と言われる新聞に発展させた。また、スタッフには、フラーの他、ジョージ・カーティス (George Curtis)、ジョージ・リプレイ (George Ripley)、チャールズ・アンダーソン・ダナ (Charles Anderson Dana) など優秀な人材を集めたので、40年代から70年代に『トリビューン』紙はアメリカで最も有力な新聞となった。50年代には10人の編集者、40人の記者や通信員を抱え、1866年には、総利益90万ドル、編集スタッフの給与総額は10万ドルを計上した。1871年には雇用者数は400人から500人、週生産高は2万ドルを越えて世界一の新聞社となった (Mitchell 11)。

しかし、フラーが記者をしていた40年代は、『トリビューン』紙の萌芽期であった。グリーンリーのもと4人のコラムニストで、見開き4ページの新聞を作成し、購読者数は約3万と概算されていた。当時ニューヨークでは、『ニューヨーク・サン』 (New York Sun) 紙、『ニューヨーク・ヘラルド』 (New York Herald) 紙と『トリビューン』紙の三紙が購読者数を競っていたが、購読者数で『トリビューン』紙は未だ他の2紙を抜けないでいた。グリーンリーは、煽情主義で栄えている他紙と異なり、信頼できるニュースを供給する方針を貫いたので、それはすぐに都市部で労働者向けの主要なホイッグ党 (Whig Party) 系の新聞として成功した。歴史家アラン・ネヴィンス (Allan Nevins) は、『アメリカ人の伝記辞書』 (Dictionary of American Biography) の中で、「『トリビューン』紙は、ニュースの取材に、上品さ、道德心、そして知的な特質を加味し、アメリカのジャーナリズムに新しい基準を打ち立てた。警察事件簿、スキャンダル、怪しげな薬の広告、奇妙な人物は紙面から消え、社説は力強いが通常は穏健で、政治のニュースは街で最も正確、書評や抄録は豊かで…実力派層や堅実な人間に受けた」と解説した。

だが一般には、政界で党派性の濃い宣伝や煽情的な記事を含んだ「イエロー・ジャーナリズム」の横行が批判され、ジャーナリズムの基本が構築されつつ、真実を報道する新聞も要求された時代であった。フラーがジャーナリストとしてイタリアン・リソルジメント (イタリア統一・独立運動) に貢献した役割は四つの点に認められよう。第一に、イタリア社会での事象・事件を正確に報道したこと、第二に、政治的な動きを歴史的な視点から

解説したこと、第三に、イタリアの革命支援の主張を公表し、他紙や自国の政府に対して共和国の承認を促したこと、第四に的確な報道記事を作成するため、強力なニュース源を確保したことである。また、報道文がロマネスク調から、写実的なものに変化したことも重要である。

フラーは、特派員としてローマに滞在し 1848 年から 1850 年イタリアの革命運動を支援した。当時小国分立するイタリアでは、フランスやオーストリアの大国支配に抵抗し、ミラノでは 1848 年 3 月 17 日から「栄光の 5 日間」オーストリア軍を撤退させ、3 月 22 日 マニン (Daniele Manin) がヴェネチア共和国を樹立するなど、イタリア半島全土に自由や独立を希求する気運が漲った。教皇領のローマでは、11 月 15 日首相ロッシが暗殺され、11 月 24 日教皇ピウスⅨ世が両シチリア王国ガエータに逃亡した (244)。1849 年 2 月 9 日、革命運動を担ってきたマッツィーニ (Giuseppe Mazzini) がローマ共和国を樹立した。だが、4 月 24 日教皇の復権を図るルイ・ナポレオンが軍を出兵させ、4 月 30 日ローマの城門はフランス軍との戦いの舞台となった。

フラーは、去っていく外国報道陣を見送りローマに残ったが、ロンドン時代から交流のあったマッツィーニと、アメリカの全権公使キャス・ジュニア (Lewis Cass Jr.) の援助で、ローマ共和国政府の公文書やフランス軍ウディノ將軍 (Nicolas C.V. Oudinot)、レセップス (F.-M. V. de Lesseps) 將軍と三頭執政政府の交渉記録などを掲載し、『トリビューン』紙が公共性のある情報紙であることを国内外に示した。その上、ベルジオーゾ侯爵夫人 (Christina Belgioioso) のもとで病院監督の役割を果たしたが、イタリア人の夫オッソリ侯爵の存在をも加えて、フラーがイタリア社会の動きを理解する十分な助けになったと推察される。

近代メディアの先駆けとして、フラーの文章は初めから簡潔であったわけではない。彼女の描くイタリアの愛国者には、古典的伝統様式が纏いつく。だが、当時のヨーロッパも文化全体が、新ロマン主義から写実主義の方向に向かうように、フラーの報道文も装飾を排した写実の方向に向かった。多くの批評家の賞賛を得た、フランス軍との戦闘跡地の描写は、すべてをそぎ落とした端的な表現が非情な現実を映し出し、詩情さえも湛えている。また、イタリア社会の危機や、フラーの悲憤を伝える場面では、多くの感動的な語句 (「悲しくも栄光ある日々」 (these sad but glorious days 285) 「フランス人よ！君たちが破滅させたのは誰かわかるか、…イタリアの若者の華であり、この時代の最も崇高な者たちである」 (O Frenchmen! ... could you know what men you destroy?...the flower of the Italian youth, and noblest souls of age 300)) がある。

本稿では、フラーの報道記事から、前半はフランス軍の出兵とローマ共和国の交渉、後半はベルジオーゾ侯爵夫人の活躍とガリバルディ (Giuseppe Garibaldi) 部隊の抗戦とローマ共和国崩壊について辿り、公文書の掲載を示し、ベルジオーゾ侯爵夫人やマッツィーニからの手紙を引用し、革命支援の記事をジャーナリズムの視点から探る。

1. ローマ共和国樹立（1849年2月9日）とガリバルディ部隊

フラーは「特派員報告 28」で、ローマ共和国憲法制定議会の開会とカンピドーリオ丘の元老院議会に向かう各地代表の行列を報道し、ローマ共和国樹立の宣言を掲載した。シシリー、ヴェニス、ポローニアの旗が勇壮に揺れる中、教皇を擁するナポリ軍の旗は喪章を付けている。オーストリア参謀本部ヴェネチア宮殿の傍を、皮肉にも各国の楽団が革命歌ラ・マルセイユを奏でながら通り過ぎた。ナポレオンの甥カルロ・ルチアーノ・ボナパルト（Carlo Luciano Bonaparte）とガリバルディは一緒に行進した（Deiss 197）。フラーは、元老院議会前での宣言を以下のように報道した。

ローマ憲法制定議会の基幹法規

第一条：教皇は事実上、まさにローマ国家の世俗的支配権を失墜した。

第二条：ローマの大神官は、宗教上の儀式に際し独立して必要な保証がすべて与えられる。

第三条：ローマ国家の政治形態は、純粹なる民主主義であり、ローマ共和国という栄光ある名前を冠する。

第四条：ローマ共和国は、他のイタリア諸国と一般的な国家としての関係を持つ。

フラーはローマ共和国の内憂外患の諸事を伝えた。「教皇を支援するカトリック系諸国が、ローマ共和国に軍を進めている。南からはナポリ軍、東からはオーストリア軍、西からはスペイン艦隊が迫っている。国内の改革として、紙幣の印刷が急務であるが、金貨は国外へ流出し財政が逼迫している」（260-261）。一方、政府は出版物の検閲を廃止し、宗教界抑制のため星室庁裁判を廃止、司教の教育権を廃止し、教会財産を国有化し、宗教裁判所を廃止し建造物は貧民用のアパートに転用、国有化した土地は分割し農民に与えるなど多くの改革が示された。土地の分配は実現されなかったが、イタリアの1848・49年革命における農民政策では最も急進的であった（Deiss 220）（北原 383）。

これらのニュース源の一つは、マッツイーニであった。フラーは1849年3月9日彼の訪問を、マーカス・スプリング（Marcus Spring）への手紙で伝えた。

私は玄関のベルを聞いた。それから誰かが私の名前を言ったが、その声ですぐわかった。…もし誰かが、国の内外の敵からイタリアを護るとしたら、それはマッツイーニである。しかし彼はそれが可能かを疑っている。敵はあまりに多く、あまりに強く、あまりに賢い。しかし天は時々助けてくれるのではないか。

…その後、国民議会での演説を聞けるように、彼は二度入場許可証を送ってきた。議会でマッツイーニは、威厳のある堂々とした声で演説したが、その後は、大変疲れた様子で物悲しい表情を見せていた。（Hudspeth V. 203）

3月27日フラーは、息子のいるリエーティ (Rieti) に行く途中、イタリアン・リソルジメントのもうひとりの英雄、ガリバルディの部隊に遭遇している。ガリバルディは、若い頃マッツィーニの「青年イタリア」に共鳴し、1834年ジェノヴァとサヴォイアでの同時蜂起計画に参加したが、失敗し欠席裁判で死刑判決を受け、マルセイユから南アメリカへ逃亡した。1848年6月、14年ぶりに帰還したガリバルディは、オーストリア戦でも義勇軍を組織し戦った。彼の部隊は聖職者を平気で殺し女を強姦し、食料を出さないと乱暴するという噂があったので、部隊が到着しローマではみな恐怖に慄いていた。偶然、彼女は店に入ってきた騒々しい兵士たちに、自分の奢りでワインとパンを出すように言った。兵士たちはすぐに穏やかになり紳士として振る舞った (Memoirs II 286-287)。

リエーティに集結したガリバルディの部隊は、実際500人から1000人に膨れ上がった。噂とは異なり、ガリバルディは厳しく兵士を統率していた。部隊の問題は資金の欠如であった。故郷を離れて暮らしているのに、ガリバルディを支援する政府はなく、彼は部下に金を支給できなかったからである。彼の部隊は基本的に正規の軍隊とかなり異なっていた。主に、職工や商人、そして多くは大学生であった。百姓は殆どいなかった。貴族出身者が多く入隊したが、中でも裕福で若いボローニャ出身のアンジェロ・マシナ (Angelo Masina) は、42人の槍騎兵を引き連れ私費で賄っていた。また、歩哨がタッソー (Tasso) の「解放されたエルサレム」 (*Gerusalemme Liberata*) の一節を歌っていたと言って、オランダの画家が驚いたという逸話があるほど、部隊の文化水準は高かった。待遇について将校と兵卒の違いは殆どなく、昇進は勇敢な行為に際して即座に承認された。ただひとつ確かなことがあった。彼らは、信頼する指導者の下で自ら理想とする社会のために、命を賭して戦う覚悟があった。

通常なら、フラーはこれらの事実を報道しただろうが、この時は赤子の存在が、部隊に対する恐怖を増大させていた。『マーガレット・フラーのローマ時代』の著者ディース (Deiss 240) は、なぜ彼女がガリバルディに会見を申し込まなかったのか疑問視している。フラーはガリバルディの前途に待ち受ける役割の重大さを把握しかねていた。もちろん彼女は彼の存在が人々を奮い立たせる効果を認識していたし、またマッツィーニとガリバルディのローマにおける連合は、文字通り人々を通常では全く不可能と思われる行動に奮い立たせた。この点で、ディースの意見は多くの批評家と重なる。手紙や特派員報告を読む限り、フラーはローマ共和国の存続を確信できず、部隊を重要視しなかったのだと彼は推察する。しかし、フラーはガリバルディ部隊の退却を「特派員報告 34・35」で報道した。それ故、その後彼の功績を理解し評価したことは確かである。

2. フランス軍の攻撃と敗退「特派員報告 30」(4月25日)

ガリバルディの活躍・イタリア人の革命意識

ルイ・ナポレオンの命令で、ウディノ將軍は1万2千の軍勢でチヴィタ・ヴェッキア (Civita Vecchia) に上陸したが、初戦で敗北した。6000人の歩兵と野戦砲中隊からなるフ

ランス軍は、ローマに向かったが暑さのために疲労しただけだった。ウディノ將軍は、進軍前の演説で、聖職者側の諜報員からの報告を繰り返した。「我々は敵として、市民やローマ兵に会うのではない。双方とも我々を解放者と考えているのだ」。

装備の十分なフランス軍に対するため、ローマ共和国には早急に集められた兵士や武器しかなかった。1400人の義勇兵、300人の大学生、戦争を見たこともない1000人の国民軍、2500人の教皇庁の部隊、600名強の狙撃兵のロンバルディアの亡命者部隊、ガリバルディの1200人の部隊等々である。数の上では多少上回るものの所詮雑多な軍隊の集合であり、武器と言えば、教皇軍に配布された装備があったが、時代遅れの代物であった。

拙速に組織されたローマ軍も同様に不利であった。ガリバルディを信頼し、アメリカで民主的な考えに慣れた有能なジュゼッペ・アヴェザーナ（Giuseppe Avezzana）が、戦争大臣に指名され、ピエトロ・ロセリ（Pietro Roselli）が最高司令官に任命された。ロセリは、紳士階級の軍人で、無論共和主義者でなかった。だが、オーストリアやフランスの將軍同様、三頭執政政府によりヨーロッパの貴族政府の基準で選ばれて、將軍に昇進した。ガリバルディを最高司令官に任命することは、想定外であった。彼の南米でのゲリラ戦は、ヨーロッパでは適正な戦争行為と言えず、彼は無産階級（プロレタリアート）の出身で軍人としての資格はなかった。また彼の「部隊」の粗野な外観も、人々に嫌悪感を抱かせた。当時、正規兵は白い手袋をしていた（Deiss 235）。

最終的にフランス軍とは、ローマ市街の城門で戦うこととなった。それは、3世紀末にローマ市の周囲に作られたのだが、最早19世紀の砲火には耐えられなかった。だが、当時でさえ軍事作戦としては重要で、外国の軍隊には困難な障壁であった。ただ、大きな欠点としては、城壁の外の地形が、城壁内のローマ市街地よりずっと高かったことである。

そこで、ガリバルディは戦いが始まった時、部下を城壁外のコルジーニ宮殿（Villa Corsini）に配置した。彼は、勝敗半ばに突然の攻撃をかけ、フランス軍を退却させた。エメリン・ストーリーの日記では、夜にフラーが来て、病院では70人の傷病兵が来たと言った（James Vol.1 134）。初め、カヴァラッジェリ城門（Porta Cavallaggieri）で追い返されたフランス軍が、ヴァチカン・ガーデンにいるところが見えた。「ウディノ將軍は、ローマから4時間かけてチヴィタ・ヴェッキアに戻り、裏切られたと感じた。500人の死者を見捨て、365人の傷病兵を置き去りにしたが、政府には『4月30日は、大戦争以来の素晴らしい戦いをした』と報告し、指示を乞うた」（Trevelyan 133）。

「フランス軍は敗退したが、南からナポリ軍がローマに進軍するというニュースが入り、ローマ人はナポリとフランスが手を結ぶことに激怒した。ガリバルディは、三頭執政政府よりずっと二つの国の軍隊と戦うことの危険性を熟知しており、フランス軍が組織を立て直す前に海辺まで追い払いたいと申し出た。しかし、三頭執政政府、とりわけマツィーニは、『ローマ共和国はフランスと戦争をしているのではなく、単に防衛状態にあるだけだ』と言って許さなかった。彼は、フランスの実情や、ルイ・ナポレオンの意図を誤解していた。これが、その後起ったマツィーニとガリバルディの数々の反目の始まりだと言

われている」(Deiss 239)。

フラーは、5月6日付の「特派員報告 30」で、フランス軍に攻囲されたローマから報道し、アメリカを驚かした。

わたしは攻囲されたローマからあなた方にこれを書いている。我々の母国が今や危機に瀕している。…フランス軍のイタリア出兵については、誰も、欺かれなかったし欺かれようとはしない。フランスは明らかに、ローマ市民が普通選挙で退任させた教皇の復権を目論んでいる。フランスは、人民が教皇を受け入れていると信じるふりをする口実は全くない。それにも拘らずフランス軍は、ローマ市街への城門を攻撃し、セント・ピーターズ寺院に砲弾を撃ち込み、弾丸はヴァチカン宮殿を撃ちぬいた。フランス軍は当然の報いとして撃退され、恥辱的な敗退を余儀なくされたが、もし自ら不名誉な道を辿るといふ分別で士気を挫かれていなければ、勇敢なフランス兵がこのように敗北しなかったであろう。フランスは、イタリア解放の最期の希望を情熱的に打ち砕き、オーストリアを見張る警察官を任じ、共和国のフランス兵が、ローマ共和国を砲撃している！…だが、ローマの血も大量に流された。私はローマ人の血が、ピウスⅨ世のあのあまりに有名な4月30日の就任記念日に、ヴァチカン宮殿の回廊にベツトリと附着しているのを見た。ピウスⅨ世も、またどの教皇も再びこの庭を穏やかな気持で歩けるだろうか。不可能なことだ！教皇の統轄権は、復権を目論んだフランスの恥知らずで残酷な手段のため、消え去った。同時に、宗教世界を司るローマという聖地も再起不能に陥った。

(Dispatch 30,274)

フラーは、革命の進展を報道しながら、イタリア社会や各国の動きを分析、権力を監視し声なき市民の代弁者として、解説者の役割を果たした。「この戦いは、民主主義と、もはや合法的といえない旧体制との戦いである。50年ぐらい続くであろうし、一世代以上血や涙が流されるだろうが、結果は明らかだ。大英帝国を含むすべてのヨーロッパ諸国は、次の世紀にはみな共和制になっているであろう」(277-278)と。

フラーは、イタリア人の政治や宗教に対する姿勢の変化を伝える。「私がイタリアに着いた当初、民衆の多くは不自由な立憲君主国以上を望まず、名望貴族を尊敬し、聖職者を軽蔑はしていたが、まだカトリック教会の教義や儀式に執着していた。イタリアは、ナポリの爆弾王を必要とし、カルロ・アルベルトの三重の背信行為を必要とし、ピウスⅨ世や有名なジオベルティを必要とし、臆病で嘘つきのトスカーナのレオポルド公、パロマやモディナのごろつき殿下、『父親風をふかす』ラデツキー將軍、そして最後には愚鈍な『フランスの未来の皇帝』ルイ・ボナパルト、をも必要とした。彼らはみな民衆に政権交代は不可能と信じさせてきた。だが神意は示された。イタリアの革命は過激に進み、イタリアが独立し共和国となるまで止らないであろう」。

さらに彼女は「イタリアはもはやプロテスタントである」と言っているが、プロテスタントとは、自分でものを考える人間ということだろう。「聖者や殉教者の思い出は尊敬され、女性の理想は聖母マリアの名において賛美されるが、人々はキリストのことも考え始めた。キリストの教えは、旧体制の下では常に慎重に隠され、信仰のすべては、聖職者が民衆の罪の仲裁人となり金になるマドンナや聖者たちへ向けられてきたからだ。…いまや、新約聖書がイタリア語に翻訳され、多くの部数が普及してきた」(278)と言っている。

3. フラーの病院監督とアメリカのローマ共和国承認

ナポリ軍に勝利するガリバルディ

フラーは4月30日、クリスティ・ベルジオーゾ侯爵夫人からファテ・ベネ・フラテルリ病院 (the Hospital of the Fate Bene Fratelli) の監督を任命され傷病兵の看護にあっていた。彼女から英文で「12時に病院に行ってください。そこに着いたら、あなたは怪我人の看護をする女性たち全員と会い、夜も昼も一定の数の人員を確保できるように指示を与えてください¹」という手紙を受け取っていたのである。

フラーは、「特派員報告31」で革命運動に貢献するベルジオーゾ侯爵夫人を紹介した。彼女はミラノの大貴族、トリヴルジオ (Trivulzio) 家の子孫で莫大な財産があったが、革命運動に没頭しパリに逃げた。パリでは、評論を書き、リストやヴィクトル・ユゴーなど有名人をサロンに呼び、文人やイタリア亡命者を援助した。領地ロカーテ (Locate) でフリーエ社会主義の方針で、教育、労働、家政改革をした実験農場を経営し成功していたが、ミラノの財産はラデツキー将軍に抑えられ、すべてが破壊された。1847年にイタリアに戻り、ピウスⅨ世の自由主義的政策に期待したが、今はローマ共和国を支援している。彼女は、4月30日以来監督する病院に滞在したままである。ローマに到着後、市内を2人の女性と共に回り義援金を集めた。アメリカ人も領事ブラウン氏も含めて250ドルを寄付したと言われている (281)。

フラーは、フランスの介入に憤激しローマ共和国には同情的であるが、実際、ローマ軍や共和国政府にも様々な失態があった。ウディノ将軍の後、三頭執政政府と交渉したレセップス将軍がパリに戻った期間、ルイ・ナポレオンの支援でフランス軍は35000人に膨れ上がった。マツイーニの命令で、この間ガリバルディは、ナポリ軍を攻撃するために11000の兵を任された。だが、ロセリは残された少数の中央部隊を任されたままであった。…ガリバルディは、百姓に変装した前衛の偵察を通じて、敵方の弱い箇所を何回も攻撃するという、ゲリラ活動を続けナポリ軍を退却させたので、ロセリが戦地に着いた時には、戦いは終わり彼の従来型の戦闘計画は無に帰したのであった (Diess 245)。

後方支援はなかったが、ガリバルディは、もしロセルが彼の意見に反対しなかったら、ブルボン朝ナポリ軍を領地まで追い返すことはできた。彼はそれでも、他の共和国軍がローマに戻る間の短期間、ゲリラ活動を続けるのは許されていた。今やオーストリア軍がポローニャを打ち負かし、ローマに進軍していた。マツイーニはフランス軍よりもオー

ストリア軍を恐れていた。誰もフランスが、オーストリアのローマ占領を許すとは思わな
いが、またフランスが、オーストリアと交戦するとも思わないだろう。フランスはこの
間、ブルボン王にナポリからの援軍は不要なので、シシリーの反乱軍を鎮圧するようと
忠告した。その直後、スペインの遠征隊 4000 人がガエータで下船し、同様にフランス軍
の不興をかった (Deiss 246)。

フラーの舌戦が功を奏したかを図るのはむずかしい。彼女の特派員報告の信憑性は後世
認められているが、当初イギリス側には誤解があった。だが、「特派員報告」の記事を見
ると、フラーの抗議が効果を發揮している。フラーは、ローマ共和国について、虚偽の記
事載せたロンドンの 1849 年 5 月 12 日付け『タイムズ』紙を非難した。「ローマを退散
した『タイムズ』紙の特派員は、ローマ共和国におけるテロ行為を捏造している。たまた
ま公衆の前に現れる勇気のある聖職者たちは、真昼間に惨殺され、彼らの肉の断片は細か
くされてチベール川に投げ込まれている」と。「『タイムズ』紙の記者はローマに来ない他
の欧州の記者たちのニュース源なので、ヨーロッパのカトリック系分子はみな、ローマ共
和国をバリケードで戦ったパリの『赤』の仲間と同類だと非難している」(Deiss 222) と。

他国の新聞社もローマ共和国についてのデマを掲載し、フラーは「特派員報告 31」
(1849 年 5 月 27 日)において、抗議を続けた。「フランスでもイギリスでも、イタリアに
ついて甚だしい嘘が流布している。それによると、ローマの家々に(社会主義者の)赤旗
が翻っており、血に飢えていると言うことだ。さて、事実は、バリケードのない通りの家
に、出入り自由な御者や馬車がある印として旗が置かれている。私の居る家にも旗がある
が、私は平和を欲しており、宿の亭主たちは金銭を欲しているだけである」(279)。(括弧
内筆者の加筆)

しかし、この後『タイムズ』紙はローマ共和国について、記事上で修正したことが「特
派員報告 32」(1849 年 6 月 10 日)でわかる。フラーは、「イタリアの革命運動についてロ
ンドンの『タイムズ』紙の記事は、我々の新聞をコピーしたもので、その完璧な信頼の度
合いを見て大変驚いている。ヨーロッパには『タイムズ』紙ほど、自由運動に激しく反対
する新聞はないし、これほどその指導者や外国特派員の信頼できないものはない。彼らに
はオーストリアから金がでているようだ。私は、これが正しいのか、或いは単なるイギリ
ス貴族のへつらいなのか分からないが、イギリスではロシアよりもロシア共和主義運動に
さらに強固に反対している。イギリス人の恐怖が、憎悪を激しくかき立てる」(294)。

フラーはまた、「特派員報告 30」でアメリカ政府がローマ共和国を承認するように促
し、国が国を承認することの意義をも簡明に説明している。フラーは、「全権公使キャス
は国から臨時政府を承認する権限を与えられていない。弁護士で外交官のリチャード・
ラッシュ氏は、ポーク大統領下でフランスの公使を務めていたが、ワシントンからの指示
を待たず、2 月革命の臨時政府を承認した。キャス氏も同様の権限を与えられていたら、
アメリカも病めるヨーロッパの民主主義のために援助できた」(276-277) と述べている。

この主張は変わらず、「特派員報告 31」においても、フラーは同じ主張を続けている。

「他国の大使たちは教皇と一緒にガエータに移ったが、アメリカ大使がローマに留まっているのに、ローマ共和国の承認をしないので、ローマでは焦りと驚きが起こっている。ローマの人々は共和国の存続を要求し、教皇権への隷属を拒否した。もし現政府が崩壊するなら、内部分裂というより外国の抑圧からであろう。もしキャス氏が現政府を認めていたら、フランスのラッシュ氏の同様、脆弱なこの共和国を道徳的に強めることになったであろうに」(282)。

キャス・ジュニアは、1849年1月にローマに赴任したが、本国からの指示があるまで、教皇国家も革命政府も承認しないようにと指示を受けていた。総領事ブラウン氏同様、彼も革命政府に共鳴し、ガリバルディにフランス政府との仲介をとるとまで提案した。彼がワシントンに提出したローマ共和国承認案に対し、ジョン・クレイトンが国務長官になった時、ようやく「適切な行動をとってよい」という返答がきた。が、その時ローマ共和国は既に崩壊していた。この件を直ちにフラーの功績とするのは困難であるが、フラーが、アメリカその他の国々を民主主義社会へ導くべきであるという主張を繰り返していたことは評価できる。

『トリビューン』紙の主幹グリーンリィは、記者たちに誇りと責任感を持たせるために、署名入りの記事を書かせる方針であった。フラーは署名の他、原稿の最後に星印を付した。したがって、フラーの記事は文芸書評も政治問題も攻撃を受けることは少なくなかった。ニューヨークのカトリック司祭ヒューズ (Bishop John Joseph Hughes) は、1949年6月27日フラーに対して侮辱する記事を『ニューヨーク・ヘラルド』紙に掲載した。彼はピウスⅨ世の熱烈な支持者であり、「ローマ共和国では、共和主義者がローマ人民に恐怖政治を仕切っている」と主張した。ヒューズは、「これはローマ共和国としてグリーンリィ氏に承認されたファランクス (フーリエ主義実験農場体) である。しかも、『トリビューン』紙の外国通信を供給する女性の全権公使以外、どの外国からも大使を出さない共和国なのである」(283)と。

4. フランス軍との交渉とローマ共和国の敗北

「このように悲しくしかも栄光ある日々を私はどのように書いたらよいでしょう。簡潔に事実を述べるのが最良である」。フラーは、「特派員報告 33」をこのような文章から始めた。ウディノ將軍の攻撃から2週間、ローマ共和国との和解を試みたレセップス將軍はパリに戻り何の連絡もないところ、ウディノ將軍から最後通牒が、三頭執政政府の各部署へもたらされ、フラーは「特派員報告 33」でそれを掲載した。

【ウディノ將軍の書簡】

戦争行為がフランス軍をローマの城門まで先導してきた。もし市街地の城門で我々を締め出すならば、フランス国家に託された私の権限すべてを行使することになる。…ローマ軍も私同様、キリスト教世界の中軸であるこの町に流血の惨事

をもたらしたくないであろう。この信念に基づき、この書簡が手元に届くや否や直ちに、同封された通告を出すように。この書簡の到着後 12 時間、フランスの名誉と意図に対する返答のない場合は、やむを得ず武力に訴えることになる。

【ローマ市民への通告】

フランス軍は戦争のためではなく、自由と共に秩序の維持のために来た。わが政府の意図は誤解されてきた。攻撃作戦はローマの城門下で行われた。現在のところ、時々あなた方の砲兵中隊に応戦してきた。今、戦闘がこの上ない惨事に発展する最後の瞬間に近づいている。数多の栄光ある記念物を有するこの町を守ろうではないか？もし、あなた方に抗戦する意図があれば、取り返しのつかない惨事の責任はあなた方にのみある。

フラーは、ウディノ將軍の要求を拒否するローマ共和国の各部署からの回答をも掲載した。すなわち、秘書官ファブレッティ、パナッチ、コッチ (Fabretti, Pannacchi, Cocchi) からなるローマ憲法制定議会、国民軍最高司令官であるスタルピネッティ將軍 (Sturbinetti)、ロセリ將軍、それとアメリツニ、マツツイーニ、サッフィ三頭執政官の回答文である。

フラーは、イタリア人の戦意の向上を伝える。「フランス軍の攻撃が続き、死傷者の数が増加しているが、ローマ人の士気は高まっている。だが、ローマ軍で死傷する者は、全国から集まったイタリアの若者の華である。病院にいる彼らの多くは、ピサヤパデュア、バヴィアやローマの大学生で、最初に戦闘に加わった者たちである。切断された自分の腕にキスする者や、最良の日々の思い出として、傷口からひどい痛みを伴い取り出した自分の骨を大切にしている者もいる。長い間亡命と失望から悲しみに耐えてきた年配の男たちも、高い戦意を維持している。彼らの精神は気高く燃え盛り、英雄時代から貴重な宝としてきた歴史に生命を吹き込んでいる (300)。

マツツイーニはウディノ將軍の最後通牒を受け取った時、すぐにガリバルディの忠告を求めた。ガリバルディは、いつもの明快さで答えた。「マツツイーニ、…私自身は共和国のために、2つの方法のうちの一つを選びたい。最高司令官になるか、単なる一兵卒として働くかだ。君が選んでくれ」。この答えは、ガリバルディ独特の単純化であって、どちらも良くなかった。彼を最高司令官に任じることは、カトリック諸国の怒りをかうだろう。一方、彼の度重なる勝利はローマの人民が奮起したように次の勝利では、イタリア全体を喚起させるだろうから、旧体制分派を治めるのは、さらに難しいものとなるだろう。三頭執政官が答えを濁したので、ガリバルディは、休戦の終わるまで体を休めるつもりであった (Deiss 253)。

フラーは「特派員報告 34」で、6月22日ローマの城門がフランス軍の手に落ちた夜、ローマ共和国の運命が決まったと伝えた。「この数日間の猛暑は、仏軍の攻撃よりローマの人々にとって致命的である。昼間の仕事に加えて、仏軍の攻撃が毎晩人々を苦しめている。これらの攻撃は普通の人々が眠りに入ろうとする 11 時か 12 時に始まる。…爆撃は日ご

とに激しさを増し、6月22日午前2時には強力な爆弾の嵐に人々は恐怖の夜を迎えた。この爆撃でローマ市の城門に間隙ができ、たちまち仏軍が侵入してきた。…それがローマ市にとって運命の時刻であった。その後、毎日頑強に抵抗はするものの、フランス軍はじりじりと攻撃範囲を広め、遂にジャンニコロの丘（Janiculum）から見晴らしのよい場所に大砲を設置し、ローマ市全体が攻撃的となった」。22日以降、負傷者は日毎に重症となり、通常病院に運ばれてきても手足の切断という結果になる。「28日からの攻撃がひどく、ラッシ・ホテルの上や近くに爆弾が落ち、30人が亡くなったと聞いた。ミラノの「栄光の5日間」に名を馳せたマナラ将軍（Luciano Manara）は、1848年春、600名のロンバルディア砲兵中隊を率いてローマに来た、ガリバルディの重要な参謀であった。今回、マナラ将軍は、何百人もの兵士と共にスパダ宮殿（Villa Spada）で亡くなった。そこで、ガリバルディは、これ以上の抵抗は無駄だと議会で告げた」（302-302）。それが、ローマ共和国の最後であった。

ローマ共和国の降伏後、フランス軍がガリバルディの身の安全を保障しないと言ったにも拘らず、他の軍隊に属する多くの兵士も彼に従う意志を示した。ローマ共和国の崩壊後7月2日の夕方、フランス軍は河を渡りローマ全市を占領する予定であった。フラーは知人とコロソ通りに行ったが、ガリバルディと連隊の出発を見送る人でごった返していた。フラーは部隊の出発をバロックの歴史画のように勇壮に描写した。

ガリバルディの槍騎兵が次々に全速力で疾走していった。彼らはみな身のこなしが軽やかで、強靱な体を持ち、イタリア南部のこの上なく洗練された雄々しくも美しい姿で、歯向かい、抗い、死をいとわぬ豪胆な魂を表す、高潔で端正な顔立ちをしていた。私は、ウォルター・スコットがこの世に甦り、彼らの姿を目にしてほしいと思うほど、このように美しくロマンティックで、かつ悲壮な光景は見たことがない。ローマを知るものはあの広場独特の荘厳さを知っているであろう…夕日が傾き、三日月が昇ってきて、イタリアの若者の華が荘厳な場所に行進して行く。彼らはイタリア独立の砦として全身全霊を傾け、各地から駆けつけた。この最後の強固な砦で、彼らは自らの主義に従い、最良で最も勇敢な犠牲を奉げてきた。彼らは今ここを立ち去るか、捕虜か奴隷となるかしかない。どこへ行くのか、ハンガリー以外、彼らを受け入れる所はない。名誉の赴くままに、ということか。彼らはみな、ガリバルディ部隊の鮮やかな赤いチュニック、ギリシャ帽かピューリタンの羽のついた丸い帽子をつけ、長い髪の毛は風にたなびき、剛毅を漲らせている。彼らはこの悲劇的な闘争に参加する前にその犠牲を慮ってきた。民族の自由のため、生命やその他あらゆる物質的な恵みを捨ててこちらを選択した。彼らは過去を顧みず、この苦い危機から逃げることはない…多くの若者が富裕層の出身であるが、この世の思い出をハンカチに包んでおり、女たちは悲しみに湛え、別れの覚悟を示している。ガリバルディの妻は馬に乗り従っている

が、彼自身は目立つ白いチュニックを着ていた。その表情は中世の英雄そのもので、彼の顔は未だ若々しく、多くの高揚する人生の場面でも、頬や眉には疲れが見えない。勝利しようと敗北しようと、人は彼の中に、生来の社会正義に奉仕する男の姿を見るであろう。彼は胸墻から望遠鏡で道路の前方を見て、遮るものがないのを確かめ、ローマ市街を振り返り城門から去っていった。人々の心は重く、目は焼けた石のように熱く、しばらく誰れも涙ひとつ流さなかった。

(Dispatch 34, 304)

現代の読者は、ここでフラールの古典の教養がローマ人の英雄行為を連想させたと思うだろう。彼女は、ローマを護る共和主義者に古代の英雄の徳、真剣な目的、不屈の意志、忍耐力、自制心を見ている。ただそれをフラールの想像力にだけ帰する必要はないようである。当時のイタリアで大学教育は、古典の伝承に傾斜していて、レヴィトス やタキトースやプルタークは彼らの現実だったという意見もある (Trevelyan 170)。ガリバルディの部隊を、山賊 (Brigands) とか流浪人 (Vagabonds) とする人がいるが、彼らの多くはオーストリアや教皇の迫害を逃れてきた若者であるとフラールは擁護する。

その数日後、フラールはローマ軍がフランス軍と戦った場所を歩いている。抒情的なガリバルディ 出発の文章に比較し、その乾いた非情な戦闘跡地の写実主義は、現代メディアの目指すところである。

昨日私は、戦闘の場所へ行った。クワトロ・ヴェンティ別荘 (Casino Quattro Venti) とヴァッセロ別荘 (Casino Vascello) はフランス軍とローマ軍が数日間激戦を繰り広げたところで、あたり一面めっちゃめっちゃに壊れ、美しい化粧漆喰画や絵画の破片が未だ、連続砲撃で開いた大きな穴の間の垂木に貼りついており、そこが残骸の塊になった時にも兵士たちはそこで戦っていたと思うだけで、そら恐ろしかった。フランス軍は、最後の数日間まったく巧妙に隠れていた。私の経験不足な眼にも、フランス軍の緻密な作戦は奇跡的であり、この組織化された軍隊に対するイタリア軍の無能さが、初めてありありと分かった。イタリアの将軍たちはフランス軍のローマ攻囲作戦を理解するための、十分な戦術さえ持ち合わせていなかった…

それから、蜂の巣のようにすっかりえぐられ破壊されたフランス軍の駐屯地に入った。骸骨のような二本の足がバリケードの山から突き出していた。その下では、一匹の犬が兵士の死体にかかった砂を掻き出していたが、それが服のまま顔を上にして倒れているのを発見し、その犬はぎょっとして死体を眺めていた。

(Dispatch 34, 310)

5. 革命家たちの敗走・ローマ脱出【特派員報告 35・36】

革命の理想は高邁であるが、革命家の運命は常に過酷である。ここではマッツイーニとベルジオーゾ侯爵夫人のローマ脱出についてフラーの支援を記す。

フラーが監督看護していた病院がフランス軍の本部となり、「フランス軍はすべての患者を『塗油式』（葬式）の必要な者以外はテルミニ刑務所に移せと命令した。ベルジオーゾ侯爵夫人はそっけなく追放されたが、彼女は、…トリノの新聞に告発状を送った。『フランス軍は、従軍牧師を解任し代りに狂信的な修道士をおいて、傷病兵に告解を促し、…政治的な告白をしないと飢えと渇きで死なせてしまうと脅かしている』と。フランス軍はベルジオーゾ侯爵夫人に対して、監督時の病院の全費用を補填するよう求め、不法履行を理由に罰しようと破廉恥な企てをしている」(316)。この後、彼女はマルタ島からイスタンブールへ逃げたが、キャス・ジュニアによれば、「彼女のように、正義のために戦った女性を受け入れるキリスト教国はないが、異教の国があるなんて、これが、19世紀の話か疑うようなひどい話だ」(Deiss 284)と伝えられている。

ガリバルディは4000人の兵士たちとヴェニス共和国へ向かったが、途中サン・マリノ共和国で部隊を解体した。その後、少人数で漁船に分乗しオーストリア軍を突破したが、フラーの特派員報告では彼の妻の死も伝えられた(314)。ガリバルディ出発後一週間、マッツイーニは、ひとりでローマ市内を歩きまわっていた。当時、彼がフラーにパスポートを依頼した手紙が、現在2通フラーの遺品としてハーバード大学ホフトン図書館に保管されている。一通目は、議会最後の論争で、マッツイーニの降伏への抵抗を髣髴とさせ、またローマ共和国降伏に際して「我々はどこに行こうと、そこがローマだ(Dovun-que saremo, colà sarà Roma.)」(Trevelyan 227)と言ったガリバルディの言葉を蘇らせるものである。マッツイーニは、アンジェル・ブルネッティと息子、12歳のロレンツォのパスポートを依頼したが、既に二人はガリバルディに従いローマを出発し、その後オーストリア軍に処刑されたと言われている。第二の手紙では、「1849年7月5日?」となっているが、如何にマッツイーニにとって、ローマからの脱出が困難を伴うか理解できる。

【Mazziniの手紙I】

マーガレット・フラー嬢へ(グリゴリアナ通り メゾン・デアズ宛て)

親しい友人へ すべてが終わった。私は最後まで弱腰の議会に抗議してきた。議会も政府も軍隊もみなローマを出て他の場所で存続しようと提案したが、無駄だった。私は厳粛に抗議した。抗議文を一部君に送る。しかしもう終わった。少なくとも現在は。私はどうすればよいかわからない。そのことは考えられない。しばらくは他の者たちのために働かせてほしい。アンジェル・ブルネッティ?(Ciercchim 解読不明)とその息子、12歳のロレンツォ、彼らは城壁の外で勇敢に戦い、教皇側やその密使たちを恐れている。私は、…もし出来れば、ふたりのパスポートを準備したいが、それをあなたにお願いしたい。…これからの私にも

役立つように、3人目も加えてもらえないだろうか。敬具 マッツイーニ²

【Mazziniの手紙Ⅱ】

フラール嬢へ（グレゴリアーナ通り カサ デイズ）

親愛なる友人へ、私は決心した。ここを発つ。発つ努力をするのだ。スイスへ行ねばならないが、それは問題だ。陸路ではトスカーナ、ピエモンテなどを横断しなければならず、オーストリア軍がいるし、ピエモンテ政府はオーストリア軍と変わらないからだ。海路だと、今攻囲状態の町チヴィタ・ヴェキアがあるが、あちらがその気なら逮捕されるだろう。マルセイユは最悪だ。私は顔を知られているし、一度マルセイユを越えれば用心深く旅行できるのだが。…君はアメリカ人がイギリス人の家族でスイスへ旅行する者を知らないか。少し変装して、アメリカ人のパスポートがあれば、旅行はたやすくなるだろう。…一言返事をくれたまえ。

君の友人 マッツイーニ³

ヨーロッパ各国の穏健派たちは、ローマ共和国の革命家たちを必死に支援した。「フランスの自由主義者トクヴィルは、教皇の報復から逃げるものは誰でも助けるつもりだった。合衆国の使節団は三頭執政官に、ジョージ・ムーアという名前のパスポートを用意した。また、英国の総領事は他の亡命者たちに500通ものパスポートを出し、パーマーストン卿から叱責されたと言われている。最終的に、マッツイーニは、フランス船の船長の助けでマルセイユに到着、その後スイスに滞在してからイギリスに亡命した」(Smith 73)。

現代の見地からすれば、ピウスⅨ世とフランス政府の動きは確かに品性を欠く。しかし、マッツイーニは敗色が濃くなってから、10日も敗北を認めず若者の命を徒らに犠牲にしたことは咎められても仕方なく、ガリバルディも、塹壕にいるフランス兵に対して何回も突撃命令を出し、味方に大量の死者を出し、愚かさや無能を露呈したとの批判がある。1848年の革命は、多くの希望に満ちた理想を実現するための出発点ではあったが、また多くの過ちもあった。ただ、フラールはこの革命を、暴政を覆して長年耐えてきた日々を取り戻し、自由を獲得するものと考えていた。

終わりに

フラールは、特派員としてイタリアの革命に遭遇したが、その報道記事は、真剣な眼差しと魅力的な事件、緻密な構成により、挫折や敗北に彩られる歴史や人間の姿が非情に浮かび上がるポストモダンの様相を保ちつつ、一方で、人間信頼の大きな理想や希望を奏でる偉大なドラマとなった。グリーリイ同様、フラールもジャーナリストの立場を貫く厳しい覚悟があり、それがイタリアからの記事に輝きを与えている。ジャーナリズムの基本として、事実を伝えること、歴史的真實の把握、政治的なスタンスの明確化、ニュース源をつかむ才能にフラールの実力が十分に発揮されたのがこの特派員報告である。

現代の基準からみると、正確な事実の報道、歴史的な意義の解説などは当然と思われるが、19世紀アメリカのジャーナリズム界が未だ玉石混淆であったことを考えれば、フラーの記事が優れていたことは理解できる。また、イタリア関連の報道について、当時最も信頼されたロンドンの『タイムズ』紙との競争でフラーが立ち勝っており、それ事態がニューヨーク・ジャーナリズムの台頭を示している。フラーの革命支援の主張は、その後本国アメリカでイタリアやハンガリーを支援する熱狂的な運動を巻き起こしたと言われ、事実、亡命先のアメリカやイギリスでガリバルディの人気は大変なものであった。

現代、ジャーナリズムの政治的社会的独立性、中立性を主張する者は多い (Kovach 170)。人間関係や組織、利害関係からの中立は当然として、ジャーナリズムの中立性については議論の余地がある。人は、ある事象や事件にまったく中立であるという姿勢をとり得るのだろうか。むしろフラーのように署名入りや星印の記事を掲載し、自らのスタンスを明確にする方が正直で、内容も理解しやすくなるであろう。フラーは、ある時点でアメリカの民主主義社会を謳う者は、ヨーロッパでは共和主義者で革命家なのだと悟った。彼女は、ローマ教皇を世俗的な支配者およびカトリック教の長として支援するフランスと、イタリア半島の新たな市民政治への流れを、歴史的せめぎあいとして捉え、ヨーロッパの進むべき政治体制にアメリカの民主主義の光を掲げようと呼びかけたのである。

フラーのローマ共和国の樹立と崩壊の特派員報告には、彼女の私生活の大きなドラマが重なりあっている。彼女は秘密裏にイタリア人で年下のオッソリ侯爵と結婚、男児を出産していた。そのため、リエーティに引き籠り特派員報告は一時中断、出産後は乳母に男児を預けたままローマでの報道に関わったが、革命期にローマから出られず、親からの連絡が途絶えた男児は餓死寸前の状態に放置される事態となっていた。経済的な不安、家庭をもつ喜びと不安、夫の家族の反対があり、彼らの結婚は宗教、人種、年齢、教養などすべてが不釣り合いで、故郷ニューイングランドでスキャンダルを免れないという心配があった。フラーは家族や友人を説得するという言葉の戦いをも戦っていた。このことが、彼女の報道活動を多少遅延させたにしろ、人間社会の現実についての理解は必ずや深まったにちがいない。フラーが、共和国崩壊後フィレンツェで束の間の家庭生活を送ったことは、その後まもなく一家全員が帰国時ニューヨーク沖で、エリザベス号の座礁で海の藻屑と消えたことを考えると、天の配剤であったか。フラーは「ローマ共和国史」を書く構想を持っていたようであるが、この最後の数本の特派員報告が、フラーの「白鳥の歌」となった。

注

- 1 FULLER MANUSCRIPTS Index to volume 11,P29, Belgiojoso, princess letters to Ossoli, S. Margaret (Fuller)1849. (MS Am 1086 Houghton Library, Harvard University)
- 2,3 ibid. Mazzini, Giuseppe Letter to Ossoli, S. Margret (Fuller) Index to volume 11, 111-113 (1849) (MS Am 1086 Houghton Library, Harvard University)

3075 Apr 18 1879.

COMITATO DI SOCCORSO

PEI FERITI

Dear Miss Fuller

You are named ~~as~~ Regentess
of the Hospital of the Fate-Bro-
fratelli - Go there at twelve if
the alarm bell does not ring
before - When you arrive there
you will receive all the women co-
uning for the wounded and give
them your directions so that you
are sure to have a certain num-
ber of them, night and day
May God help us

Christine Froude
of Belgium

(注1) (MS Am 1086 Houghton Library, Harvard University)

Dear Friend. It is all over. I have
 struggled to the last against the weakness
 of this ~~assembly~~ ^{at last proposed}
 that assembly, Government, rising and all
 should walk out of Rome and joining
 the ~~republican~~ ^{republican} ~~clerk~~ ^{clerk} in vain. I have
 solemnly protested, and I will send you
 a copy of my protestation. But it is all
 over, so the present moment, I don't know
 as yet what I shall do, I cannot think
 of it. Meanwhile, let me work for other
 things. ~~Monnet~~ (Cimminello) and his
 son ~~Monnet~~, twelve years old, but having
 fought bravely out of the way, and
 afraid of the priest and of their agents.
 I have been obliged to persuade them
 to get, if possible, a passport for them
 and I will ~~send~~ ^{do} that. I could
 write to Mr. Loy for that, but I
 prefer to wait myself of your help.
 You must have found ~~arranged~~ the

influencing ~~Assembly~~. Could they get the
 passport with different names of some
~~be~~ ^{be} to be filled up with ~~admission~~
 Italian names list of subjects of the
 U. S. or to have protection ~~agreed~~,
 they would do a good action. Could
 they add a third, it might perhaps be
 of some use to me hereafter.

Ever very

adieu to

Thy. Mazzini

Giuseppe Mazzini

via. Borgo di. Giove.

July 3.

(注2) (MS Am 1086 Houghton Library, Harvard University)

7.

I have made my mind up, dear friend, and I shall go, that is, endeavor to go. I must go to Switzerland. How to reach it, if the problem, by land, I know no easy flying, distances, etc., and the American and Swiss and the Swiss mountains Government has not yet decided the American, by sea, I have considered, in down on that I shall go, and when they come, if they come, and then naturally, they shall have other plans: I am however the only one who is naturally, and travelling could have had nothing to fear.

Do you know of any American family travelling towards Switzerland, or going to travel? Joining them, under a false disguise, and with my American passport, they would be under no suspicion of being, and then any chance of finding out and, I could patiently await, and keep myself concealed till the day of their departure.

There is not, most likely, any possibility for such a thing. Still, if the thought ever occurs, that of us immigrants in staying in fact, you will require a word, and

Miss ...
 Traverso Dies
 Via Gregoriana
 Rome.

(注3) (MS Am 1086 Houghton Library, Harvard University)

Text

Fuller, Margaret: *“These Sad But Glorious Days”- Dispatches From Europe 1846-1850* edited by L. J. Reynolds & Susan Belasco Smith (Yale University Press 1991)

* 本稿の特派員報告の文章はこれをテキストとし、他の参考文献の文章も含めて引用文はすべて筆者が日本語に翻訳したものである。著者名のない引用文の数字はすべて本書のページを表す。

-----: *Summer on the Lakes, in 1843* (University of Illinois Press 1991)

-----: *Woman in the Nineteenth Century* World Classic (Oxford University Press 1994)

-----: *The Letters of Margaret Fuller* VI edited by Robert N. Hudspeth Cornell University Press 1994

-----: *Memoirs of Margaret Fuller Ossli Volume I, II* edited by J. F. Clarke, R. W. Emerson (Biblio Bazaar, LLC 2011)

-----: *Margaret and Her Friends: Or, Ten Conversations with Margaret Fuller* Edited by Caroline Wells Hearley Dall (Biblio Bazaar 2011)

参考文献

Capper, Charles : *Margaret Fuller: The Public Years* (Oxford University Press, 2007)

Capper, Charles and Giorcelli, Cristina edited: *Margaret Fuller- Transatlantic Crossings in a Revolutionary Age* (The University of Wisconsin Press 2007)

Deiss, Joseph Jay: *The Roman Years of Margaret Fuller* (Thomas Y. Crowell Company, 1969)

Header, Harry: *Italy in the Age of the Risorgimento 1790-1870* (Longman, 1983)

James, Henry: *William Wetmore Story and His Friends: From Letters, Diaries, and Recollections* (Nabu Press 2010)

Kovach, Bill & Rosenstiel, Tom: *The Elements of Journalism* (Three Rivers Press 2001)

Mitchell, Catherine: *Margaret Fuller's New York Journalism*, (University of Tennessee Press, Knoxville, 1995)

Nevin, Allan: *Dictionary of American Biography* (1934 - 36) (www.tulane.edu/~latener/Greeley.html)

Smith, Denis Mack : *Mazzini*, (Yale University Press, 1994)

Trevelyan, George Macauley: *Galibaldi's Defense of the Roman Republic 1848 to 1849* (Kessinger Legacy Reprints, 1910)

ウルフ, スチュアート・ジョーゼフ 『イタリア史 1700 - 1860』 鈴木邦夫訳 (叢書ユニベルシタス 699 2001)

カスー, ジャン 『1848年 2月革命の精神史』 野沢協監訳 / 2月革命研究会訳 (叢書ユニベルシタス 91, 1991)

北原敦編 『イタリア史』 (山川出版 2008)

佐藤卓己 『現代メディア史』 (岩波書店 1998)

ダガン, クリストファー 『イタリアの歴史』 (創土社 2007)

マルクス, カール 『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18日』 上村邦彦訳 (平凡社ライブラリー 2008)

藤沢道郎 『物語 イタリアの歴史 解体から統一まで』 (中公新書 1045 1991)

上野和子 : 「インディアン問題 : 超絶主義的アプローチ : *Margaret Fuller: Summer on the Lakes, 1843* の

再版に際して』『昭和女子大学女性文化研究所紀要』19号 1997

- : 「マーガレット・フラワー：イタリア・リソルジメントへの軌跡 (1) アメリカ奴隷制廃止運動と穀物法廃止」昭和女子大学『学苑』698号 1998
- : 「マーガレット・フラワー：イタリア・リソルジメントへの軌跡 (2) 二月革命前夜のフランス」昭和女子大学『学苑』701号 1998
- : 「マーガレット・フラワー：イタリア・リソルジメントへの軌跡 (3) マーガレット・フラワーとジョジュル・サンド」昭和女子大学『学苑』709号 1999
- : 「マーガレット・フラワーの女性解放論」英米文化学会編『行動するフェミニズム』（新社2003）
- : 「マーガレット・フラワーの反カトリック思想」昭和女子大学女性研究所紀要第31号 2004
- : 「マーガレット・フラワーとジュゼッペ・マッツィーニ—人民とは誰か」昭和女子大学『学苑』774号 2005
- : 「マーガレット・フラワーのイタリア便り—教皇ピウスIX世とイタリア統一・独立運動」昭和女子大学女性文化研究所叢書第6集『女性と文化』（お茶の水書房 2008）

(うへの かずこ 文化創造学科教授 女性文化研究所所員)